

和漢古書の情報と補修

～書物の顔から刊年を探る～

和漢古典籍研究分科会

身延山大学図書館 沼田晃佑

1. はじめに

和漢古典籍を扱っていると、様々な疑問に直面することがある。今期分科会会員からは、保存補修についてと無刊記資料の刊年をどのように推定したらよいかについて、疑問の声が多く聞かれた。今回はこの2つをテーマに取り上げ、学んできたことを以下に報告していく。

2. 古典籍の保存と補修について

まず、和装本の保存・補修の現状を知るため、本分科会会員とOBの所属大学に以下の7項目の質問を行った。

- Q1 どのような装備を行っているか
 - Q2 どのように保存しているか
(配架の仕方、配架場所の温度・湿度等)
 - Q3 燻蒸を行っているか
 - Q4 虫食い・紙の劣化など補修が必要なものについて、どのように対処しているか
 - Q5 修復費用は予算化されているか
 - Q6 和装本の資料保存についての疑問点
 - Q7 和装本の資料保存について困っていること
- 今回は和装本に関するもので、大学によっては和装本をすべて貴重書とする大学もあれば、刊行年によって貴重書とその他に分けている大学もあったが、結果は次の通りになった。

Q1. どのような装備を行っているか
現物への装備を行わないところが3分の1程度だった。装備をするところでは、請求記号の装備が多く見られ、その他には蔵書印、請求ラベルの貼付、登録番号の貼付などもあった。装備を行っ

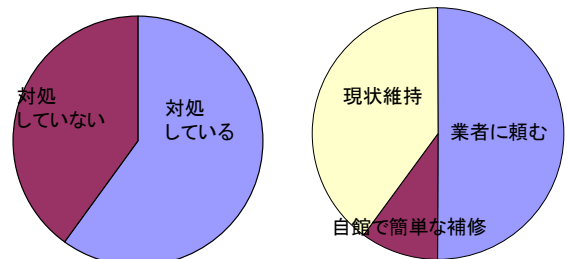
ている大学でも、貴重書扱いのものについては装備をしないというところが多かった。

Q2 どのように保存しているか
(配架の仕方、配架場所の温度・湿度等)
配架の仕方では和装本ならではと思われる「平積みして配架する」ところが3分の2近く見られた。温度・湿度管理を行っているところが殆どで、温度を20～25度、湿度を40～60%に保っている。文献では、温度は18～22度、湿度は45～50%が適当としている。

Q3 燻蒸を行っているか
燻蒸を行っているところが約半数で、虫害を防ぐ必要性を感じていることがわかった。燻蒸の頻度は1～2年に1回というところが多い。

Q4 虫食い・紙の劣化など補修が必要なものについて、どのように対処しているか
何らかの対処をしているところが3分の2以上あった。修復の手段としては、劣化がひどい資料について専門業者に補修を頼むというところが多かった。自館のみで簡単な修復をするところでは、糸綴じ程度の補修を行い、その他の部分は現状維持としているようである。専門業者に頼む大学でも、糸綴じ程度の補修は自館で行うところもあった【図1】。

対処しているか どのように対処しているか



【図1】補修が必要なものについてどのように対処しているか

Q5 修復費用は予算化されているか

補修をするときの修復費用は、予算化されているところが半数以上だった。しかし、予算化されている大学でも、和装本だけの修復費用ではないというところもあり、和装本の修復予算は十分とはいえないようである。

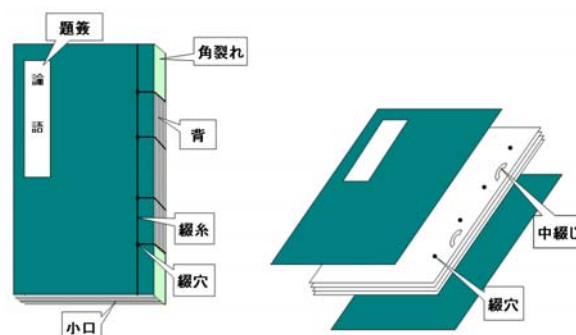
Q6 和装本の資料保存についての疑問点

Q7 和装本の資料保存について困っていること

保存については「保存に適した書架、温度・湿度は？」「カビを発生させないようにするためにはどのようにしたらよいか？」という質問があった。温度・湿度については先述した通り、温度は18～22度、湿度は45～50%が適切である。保存に適した書架については調査不足のため文献等を見つけることができなかった。また、カビの発生については、一般的に高温・多湿な状態や、埃や塵が招く資料の汚れがカビの原因になると言われているので、先程あげた適正な温度・湿度を保ち、定期的かつ継続的に清掃を実施することで防ぐことが可能だと言えるだろう。また、急激な温度・湿度の変化は資料の劣化を促進させるので避けた方がよいようである。補修については、「どの程度まで修復したらよいか？ 現状を維持か、修復した方がよいか判断に困る」という質問があった。修復か現状維持かの判断は、それぞれの資料の状態によって異なると思うが、後述する補修の実習を行ってみての感想としては、自館で裏打ちの道具や糊、紙などの資材を揃えること、また作業自体も難しいと感じた。やはり裏打ちなどの補修については専門業者にお願いすることが必要であろう。小さな虫損については、練習を積めば自館でもできるのではないかと感じた。

各大学の現状からもわかるように、保存・補修については色々と悩みを抱えているようである。予算や温度・湿度設定など、なかなかすぐに改善できることだけではないが、その中でも、自分たちで解決できることとして、破損や虫損の簡単な

補修をできるようにになりたいという声からあがった。補修の作業は、指導者の元で適切な手段によって行わないと、書物をさらに破損・劣化させることになるため、今回は松本研究室の方々に講師にお招きしてご指導を賜った。次は、裏打ち作業のデモと虫食い穴の穴埋め、糸綴じの実習の様子を報告する。参考までに、補修に当たって必要な古典籍の各名称を載せておく。



I. 裏打ち

今回のデモの中では、修理する用紙を「本紙」とする。裏打ちには、本裏打ちと投げ裏打ちの二種類があり、本裏打ちには本紙に直接糊をつけて裏打ちする方法、投げ裏打ちには裏打ち紙に糊を付けて裏打ちする方法である。今回は本裏打ちのデモをお願いした。

<本裏打ちの作業>

- ①資料を解体する前に、資料の現状を正確に記録する。記録項目は、資料の寸法、綴じ糸の太さ・色、中綴じの綴じ方、角裂の有無と色、付箋の箇所、朱筆、丁付けの順番等。
- ②資料を解体していく。糸留めは通常、資料を裏にしたとき、下から2つ目の綴穴にあるので、糸をはずす時はここから外す。表紙、中綴じを外した後、紙を傷めない程度に埃や虫の糞等を除く。その後、本紙に裏から低温でアイロンを掛けしわを伸ばす。色物は変色する場合がありますので注意する。
- ③裏打ち台を、水を含ませた刷毛でよく濡らしておく。その上に渋紙を濡らして作業台に載せる（渋紙とは、和紙を貼り合わせた上に柿渋を

塗り、強度を付けた紙のこと)。そこに本紙一丁分を、裏面を上にして置き、水で濡らした刷毛で渋紙と本紙との間の空気を除く。

④漉した薄めの糊を本紙に塗り、本紙の目の通りに裏打ち紙をのせ、皺にならないように刷毛で整える。裏打ち紙の大きさは、本紙より四方が2cm位大きいものが良い。

⑤渋紙ごと裏にして化粧板に移す（化粧板とは表面がつるつるして、和紙がくっつかないような板のこと）。

⑥本紙から渋紙をはがす。渋紙を剥がしたら、本紙に、もう一度水刷毛を掛けてから乾かす。

⑦補修が必要なすべての本紙に同工程を行い、丁数を確認する。乾いた本紙を二つ折りにして重ね、二日ほど圧力をかけて押さえる。その後、現状どおりに綴じ直す。

<虫食いの穴埋め作業>

①穴埋めは破れそうな箇所を中心に行う。本紙の裏から低温アイロンを掛け、皺を伸ばす。

②筆を水に濡らし、補修紙を穴埋めする穴の大きさより2～3mm大きく切り取る。補修紙は手で裂いて縁を毛羽立たせる。

③切り取った補修紙に糊をつける。補修は**本紙の裏から行う**為、糊を付ける面に注意する。糊は裏打ち用の糊より薄めの糊を使用する。

④補修紙に放射線状に糊を付けた後、くっついた繊維が広がってから虫食い穴に載せる。アイロンは使用せず、自然に乾かす。

⑤補修が済んだ本紙は、本裏打ちと同様に、乾かして二つ折りにして綴じる。

<四つ目綴じの作業>

四つめ綴じとは、和装本の代表的な綴じ方で、綴じ穴が4つあいているものをいう。

①まず、中綴じから行う。本紙に穴があいていない場合は先に錐等で少し大きめに中綴じの穴を開ける。見返しから中綴じの穴を利用して紙縫で留め、留めた箇所を叩いて抑える。その際、文鎮を利用すると動かなくて良い。

②見返しと表紙を糊でつける。天地は糊付けしない。

③表紙を糸で綴じる。糸の長さは、資料の天地の長さ×3+斜め1本分が適当。厚手の本は若干長めに糸を取る。綴じる時は裏表紙を上にし、地から2番目の穴の数丁下から針を入れ、天に向かって綴じていく。台の上に置きながら作業をすると糸が吊らなくて良い。

④糸留めは地から2番目の穴のところで処理をし、糸を切った先は中に埋めておく。

3. 書物の顔から刊年を探る

古典籍では、表紙そのものにも多くの書誌情報が含まれているといわれている。私たちは、表紙に使用された色、そこに注目して時系列に並べてみると、書物の出版時期がある程度推定できるのではないかと考えた。ここでは、特徴的な和漢古典籍の表紙並びに今回の資料調査で出てきた表紙にかかわる興味深い事例について述べていく。

表紙の定義は、岩波書店刊『日本古典籍書誌学辞典』によると、まず書物の本文が記された部分を保護するために外側に添えられたものとされ、続いて形状は卷子装では冒頭部分に一枚、冊子装では表表紙と裏表紙の二枚に分けられ、なお且つその材料によって紙表紙・布表紙・板表紙があるとされている。これより表紙に使用された色から書物の出版時期がある程度推定できる実例を説明していく。

一口に表紙といっても時代毎に色の流行廃りや、版元の好み等によって様々な種類に分類できるようである。会員所属校の資料を多数調査し、且つ中野三敏著『書誌学談義 江戸の板本』に掲載されている表紙の色についての記載を参照して、次の11種類に分類した。①丹表紙 ②栗皮表紙 ③紺・藍色 ④薄茶色(光沢) ⑤黄色 ⑥朱色(厚手) ⑦柿渋色(厚手) ⑧官版 ⑨嵩山房(小林新兵衛) ⑩本居宣長 ⑪平田篤胤

なお、今回の資料調査では和刻本漢籍や仏書が中心であり、国書の光悦本や行成表紙、地本類の表紙の説明については割愛することとする。

①丹表紙

丹表紙は、鮮やかな朱色（赤橙色）を使用している。この丹には水銀を含んでいるため、経年変化で部分的に酸化が進み、銀色や鉄色に変色することがある。丹表紙は室町時代より使用例が見られ、江戸時代初期の古活字版を中心に多く使用されている。有名なところでは大河ドラマ『天地人』の主人公直江兼続の所蔵と伝承される典籍に丹表紙が装訂されている例を複数見受けることができる。先人の調査によると元禄年間（1688～1704）にはその使用が途絶えるようである。但し、後世において丹表紙に改装した例も多く、鶴見大学図書館所蔵の『しんかんぞもんにゆうしきうんきろんおう新刊素問入式運氣論奥』を見ると、元は別の書物に使用されていた丹表紙をつけて改装したものであることが、書物本体の大きさに表紙を合わせるために、折り込まれていた糊白が黒く表に出てきていることから推測できる。

②栗皮表紙

栗皮表紙は、濃い茶色で光沢があり、見た目が栗色そのものである。ただ、一口に栗色といっても、同じ栗皮表紙ながらも明るかったり暗かったりと微妙に色が異なっている。使用例は『日本古典籍書誌学辞典』によると平安時代から見られるとあるが、実際には江戸の極初期の慶長年間（1596～1615年）に出版された古活字版から、寛永年間に出版された整版に集中して使用されていた。使用例は主に仏書・日本古典・和刻本漢籍など多岐に亘る。正保年間頃から使用例が減少していき、天和3年（1683年）に中野五郎左衛門によって発行された仏書の『ほっけげんろん法華玄論』の例から、この頃が終焉期と推測できる。

③紺・藍色

紺・藍色は、光沢がある濃い紺色又は濃い藍色である。また、縹色やくすんだ青色系統を使用している表紙も紺・藍色に含める。使用例は江戸の

極初期の慶長年間に出版された古活字版から見られ、江戸初期から江戸前期に集中して使用されていた。初期の段階では主に『太平記』などの日本古典が多く、以降和刻本漢籍など多岐に亘る。

④薄茶色（光沢）

薄い茶色（香色）を使用し、且つ光沢がある。栗皮表紙と比較すると、同じ茶色系統でも大きく色が異なる。薄茶色は鎌倉時代より室町時代まで禅宗寺院を中心に出版された五山版にも使用例が見られるが、光沢のある薄茶色は江戸時代前期の万治～寛文年間に使用が集中するようである。

⑤黄色

江戸末期から明治初期の書物に多く見られ、仏書や和刻本漢籍等が多い。刊記に江戸時代初期の年号が記されている場合でも、この黄色が装訂されている際は替表紙若しくは後刷りの可能性がある。また、江戸後期の戯作で黄表紙本というジャンルがあるが、ここで示す黄色とは関係はない。明治期の黄色の中には型押ししているものも有る。

⑥朱色（厚手）

丹表紙と同様朱色を使用しているが、こちらはより朱色が鮮やかで、芯紙が使用されていて厚くて硬い表紙である。表紙に型押しをしているものもある。使用例は江戸末期から明治初期の仏書に多く見られる。先行研究によると、江戸後期の戯作者などを中心に、懐古主義から自らの著作類に厚手で朱色の表紙を使用する例が見られるとある。

⑦柿渋色（厚手）

表紙の色が柿渋色で、芯紙が厚手のものを使用し、型押し模様がつけられている表紙であり、江戸末期から明治初期の和刻本漢籍に多く見られる。

⑧官版

官版とは江戸幕府の文教の中心であった昌平坂学問所で江戸後期の寛政年間（1789～1801年）から幕末まで発行された書物のことである。その表紙の特徴は、小豆色を使用し、型押しをしており、題箋に角書として「官板」と記されていることである。但し、明治時代に官版の板木を使

用した後印本が「昌平叢書」として発行されているが、その場合は「昌平叢書」と記された付箋が表紙右下に付されているので注意を要する。

⑨ 嵩山房(小林新兵衛)

嵩山房(小林新兵衛)とは江戸を中心に出版活動をしていた須原屋こと嵩山房小林新兵衛が出版していた一連の書物を称する。主に和刻本漢籍、日本漢学、漢詩集などが中心だが、『寶壽大梅禪師ほうじゅだいばいぜんじ語録ごろく』のような仏書も発行している。表紙の特徴として、薄茶色を使用し、且つ芯紙を使用しないのでごく薄手であることが挙げられる。須原屋は明治に至るまで出版を継続しており、同書肆の出版物にはこのような表紙を使用していることが多いようであるが、後述のように薄茶色以外の色を使用した表紙や、芯紙を使用したものも見受けられる。嵩山房(小林新兵衛)では時として黄色や縹色、青色系統の表紙も見かけられる。この、薄茶色の表紙とその他の色の表紙の使い分けの理由・条件については不明であり、今後の調査が待たれる。

⑩ 本居宣長

本居宣長(1730~1801)は江戸後期の国学者で、『古事記伝』の著者として著名だが、彼の著作は原則として縹色の表紙で装訂されている。

⑪ 平田篤胤

平田篤胤(1776~1843)は江戸後期の国学者として著名で、先述の本居宣長に私淑し、その学問の後継者を自任していた。彼の著作の装訂の特徴として、師の本居宣長の著作に類似した縹色の表紙を使用している。また、篤胤没後に出版されたものでも、生前の著作物と同様、縹色を使用しているものもある。

最後に、研究報告のために分科会会員各校の資料を調査した結果発見した、いくつかの興味深い事例を報告する。

① 反故紙の裏張りを利用した表紙の例

表紙の構造を見ると色なり絵が描かれている表の部分と芯の部分に分かれている。特に栗皮表紙

に限ってみると極初期の事例として版元で反故となった紙を再利用して表紙の芯にした物を極まれに見ることができる。

【図2】の資料は身延山大学図書館所蔵の『法華文句私志記』である。この書物には、通常記されている版元の名や、刊行年などの出版情報が記されていない無刊記の資料ながらも、筆書きで寛永5年(1628)の奥書がある。こちらの資料には、表紙の芯紙に反故紙が使用されている。渡辺守邦著『古活字版伝説』によると古くは表紙の芯を本文料紙と同程度の厚さの紙を数枚重ねた物を使用し、寛永中頃から厚みと弾力に富む芯紙を表紙に使用している例が出現していると示されており、無刊記であっても栗皮表紙本体の厚さが薄いものであれば寛永初年以前の比較的古い時期の刊行物の可能性がある。



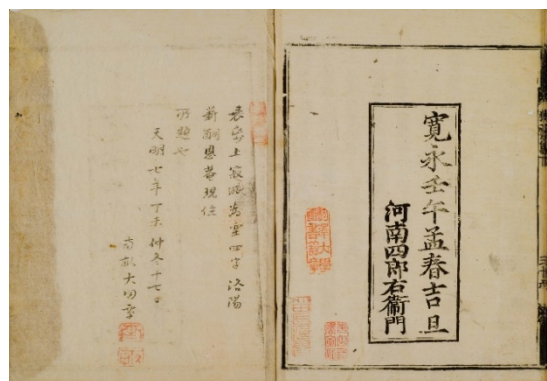
【図2】『法華文句私志記』寛永5(1628)年

【図3】の写真は『法華文句私志記』の別の巻である。先ほどの表紙の裏張りは訓点送り仮名の付かない白文資料の反故紙が使用されていたが、こちらは一部カタカナが記載されている和文資料の反故紙が使用されている。版心題には「開目」とあり、これは鎌倉時代の高僧の日蓮の著作である『開目抄』にあたる。この『法華文句私志記』表紙に使用された反故紙の原典を調査すると、古活字版の日蓮遺文『開目抄』や、日蓮宗や天台宗で唱えている法華経の注釈書が見受けられることから、当時の流通事情を勘案すれば無刊記ながらも『法華文句私志記』の版元は日蓮宗に近い関係に有る版元、例えば京都市中の本能寺や本国寺

等の日蓮教団寺院や平楽寺村上勘兵衛などが版元の候補に上げられるのではないかと推察できる。



【図3】『法華文句私志記』寛永5(1628)年



【図4】『狂雲集』

②表紙から無刊記資料の刊行時期を推定した事例

大東文化大学図書館では江戸初期に刊行された薄茶表紙、栗皮表紙の2種類の『遊仙窟』を所蔵している。資料の本文を対比してみると、双方の資料は共に寛永初年より出現している本文に訓点送り仮名が付いた「附訓点送仮名」本である。二つの資料を対照すると字体が一致しており、同じ版木を使用した同版であると考えられる。続いて最終丁にある奥付を対比してみると、薄茶色表紙の方は慶安5年(1652)の刊記が存在し、栗皮表紙の方は無刊記である。栗皮表紙の使用した資料は前述のように寛永年間まで主流であり、薄茶色表紙よりも栗皮表紙のほうが発行時期が古いものが多いことから、無刊記版『遊仙窟』は寛永以後、慶安5年頃までの刊行であると推定できる。

③著名な蔵書家が蔵書を好みの表紙に改装していた事例

【図4】の資料は駒澤大学図書館所蔵の『狂雲集』である。『狂雲集』は室町時代中期の禅僧の一休宗純(1394-1481)の漢詩集である。この資料の刊記は寛永19年(1642)に京都の版元である河南四郎右衛門によって発行されているが、板面が荒れており後刷りだと考えられる。この資料は江戸時代後期の文人大田南畝(1749-1823)の所持本であったことが奥書並びに蔵書印で判明するが、元の表紙ではなく、薄茶表紙に改装されている。これは和漢古典籍の改装が容易なため、所蔵者が好みの表紙に差し替えたものと考えられる。

以上、加盟大学の所蔵資料の表紙に表れた主要な9種類から年代の調査を行ったが、この結果をみると、ある特定の時期に特定の色が集中して使用されていることが分かる。そのことを手がかりとして、原装の無刊記本の刊行時期をある程度推定することが可能であると考えられる。ところで、今回の報告では1737-1780年の年代の資料についての事例がないが、それはこの時期に、水色、黄色等、色々な色が混在しており、特定できなかったからである。つまり色の特定が不可能なことが特色として挙げられるのではないだろうか。それが何故起こったのか、今後の調査研究を待ちたい。

4. まとめ

以上が、保存補修についてと無刊記資料の刊年をどのように推定したらよいかについて、私たちが学んできたことの報告である。糸綴じ程度の簡単な補修であっても、自館でできれば、少しでも劣化を防ぐことができる。また、無刊記資料の表紙の色による刊年推定も、全ての資料に当てはまるわけではないにしろ、判断材料のひとつにできることは、大きな収穫だと思う。保存と補修、無刊記資料の問題は、和漢古典籍の多くの従事者が悩んでいることではないかと思う。今回私たちが学んだことを報告することで、少しでもそういった方々のお役に立てばよいと思う。そして、それが延いては図書館利用者のためになればよいと思う。